第２節　漢字・語彙指導の工夫―「ワード・フレーズハンティング」を通して

１　ワードハンティングの試み

中学校および高等学校における漢字指導のあり方を考えるに際して、学習者の興味・関心を喚起するという要素を最も重視した授業の構想を検討してみたい。本節では漢字のみを取り立てて扱うという方向ではなく、語彙指導との効果的な連携において扱う方向を考えることにする。学習者の実態に目を向けてみたとき、国語科の教科書や授業という学校に関わる場所のみに限定して漢字の習得をしていると考えることはできない。彼らは日常生活の中で接する多様なメディアから、漢字や語彙を学習し、習得している。特に漫画やテレビゲームおよびインターネットを通して習得する漢字・語彙の数は決して少なくはない。学習者の生活に深く関わるような学びの構想を工夫する必要がある。本節では、中学生および高校生の語彙を豊かにすることを目標とした漢字指導の方法について、実践に即して紹介する。漢字指導と語彙指導とを別個のものとして切り離して考えるのではなく、両者を関連させた「漢字・語彙指導」という観点から考察を進めることにする。

漢字および語彙に関する指導は、表現や理解の指導と関連的に扱うのが一般的である。特に高等学校の国語科では、漢字・語彙のみを取り立てて扱う機会は少ない。そこで以下に学習者が漢字・語彙に親しみ、語彙を豊かにすることを目標とした、「ワードハンティング」と名付けた学習活動を提案する。

「ワードハンティング」の具体的な内容に関しては、すでに拙稿「単元『身近なことばを集める』―『ワードハンティング』の実践」[1]において報告した。その後漢字・語彙指導に生かすことができるように改善したものを、本節では改めて紹介する。

「ワードハンティング」というネーミングは、見坊豪紀に学んだ[2]ものである。見坊が国語辞書編纂のために膨大なことばのデータを収集したことを範として、学習者に身近なことばに目を向けさせ、ことばを集めるという活動を通して語彙を豊かにすることを、ワードハンティングの学習目標とした。今回は特に漢字の習得に配慮して、漢字を用いたことばの採取ということにする。

漢字・語彙の学習は、学習者が年間を通して継続的に行う工夫が必要である。それに加えて言語に関連した単元の中で重点的に漢字・語彙指導を展開することによって、さらに効果を高めることができる。ワードハンティングの学習は、年間を通して実施するものだが、同時に特設単元の中でも関連的に扱うという指導計画を立てることができる。

ワードハンティングはまず、中学生・高校生が身近な漢字や語彙に目を向けるところから出発する。そして「ハンティング」という名称の通り、様々な場所から漢字を含むことばの採取を実践するわけだが、探索する場所としては書籍、新聞、雑誌、パンフレットなどの文字にとどまらず、テレビ、映画、ＣＭ、インターネットなどの広い範囲を対象とする。漫画やアニメーション、テレビゲームの中に出て来ることばなどにも目を向けて、すべての学習者が関心を持つように配慮した。

一日に一語ずつハントするのが理想であるが、学習者の負担を勘案のうえ、一週間に一語以上というノルマを課すことにしてもよい。年間を通して、継続的に取り組むように指

導する。また採取することばは漢字を含むものとして、彼らが意味をよく理解しているものは避け、初めて出会った漢字、読めない漢字、意味がよく理解できない漢字などを含むことばを重点的に探索するようにする。

採取したことばはカードに記入する。カードはＢ６サイズの情報カードとして、必ず一枚に一語ずつ記入するように指導する。記入方法のフォーマットは、まず採取したことばを「見出し語」としてカードの上の欄外に記入する。後で五十音順に整理するときの便宜を図って、右上に最初の一文字を記入しておく。漢字は必ず正しい読み方を調べて記入し、さらにことばの意味を国語辞典などの辞書によって調査して見出し語の下に記入する。次の欄にはそのことばを採取した場所で、どのような文脈の中で用いられているのかを正確に写しておく。その次の欄には出典、すなわちどこから採取したのかということを、詳しく記入する。書物の場合には、書名、著者名、発行所、発行年月などを必ず記録しておくように指導する。次に採取した年月日を記入する。そして最後に「問題意識メモ」として、そのことばに関して感じたことや考えたことを自由にメモするスペースを設けることにする。このような方法によって、身近な場所から様々なことばを採取して、カードに記録するという学習に取り組むことが、ワードハンティングの学習活動である。なおカードはすべて手書きとなることから、「手書き」の機会を多く設けることも副次的な目標となる。

ことばのカードは、専用のファイルに綴じてストックするように指導を徹底する。年間を通しての課題とした場合には、国語の時間に教師が定期的に点検する必要もある。カードの提出状況および記入状況を見ると、個々の学習者のことばに対する興味・関心の度合いや、課題に取り組む意欲・態度が端的に表れていることが分かる。ワードハンティングを日常の評価に有効に活用することができる。

このようなワードハンティングの課題に継続的に取り組むだけで、学習者のことばに対する興味・関心は深化し、自然に漢字を習得し、語彙を豊かにすることができる。しかしながら、単に課題として扱うだけでなく、学習の成果を生かしながら国語の授業においてより発展的に扱う方向も工夫したい。そのためには４名から５名程度のグループを編成して、グループの中でカードを相互に交換して、他のメンバーのワードハンティングの成果から新たな漢字・語彙との出会いを促すような配慮もほしい。なおグループ学習の際に、カードの「問題意識メモ」の欄に記録した漢字・語彙に関する問題意識を交流し、話し合うことにする。

ワードハンティングは、年間の指導計画に即して様々な応用をすることができる。特に言語に関する単元を扱う際には、学習の成果を有効に生かした指導が考えられる。学習者がハントしたことばを、出典別にグループを編成して漢字・語彙の傾向を調べると、様々な発見がある。例えば漫画を中心にワードハンティングを実施したグループでは、漫画における漢字・語彙の特徴を検討し、集まったカード全体を眺めてどのような特徴が浮上するかを話し合う。グループにおける研究の成果を整理して、グループごとに研究発表へとつなげるようにする。

年間を通してワードハンティングの課題に取り組むことが困難な場合、短期間に集中して取り組むこともできる。その場合には、具体的なテーマを掲げるのも一案である。例えば「広告のことば」や「季節のことば」、「歌詞のことば」や「年末年始のことば」などのテーマを掲げて、テーマに関連した漢字・語彙を採取する。

多くの漢字の読み書きを習得し、語彙を豊かにすることは、そのまま学習者の思考を豊かにすることである。そしてワードハンティングの導入は、序章で引用した佐藤学の提案する「学び」の復権にも直結する。

２　フレーズハンティングの試み

わたくしたちの周囲には、常に様々な言語表現が溢れている。街を歩くとき、電車やバスに乗ったとき、食事やショッピングのために店を訪れたとき等々、無意識のうちにも多様な言語表現と接している。巧みな表現として印象に残るものもあれば、問題のある表現として違和感を覚えるものもある。国語教育は、言語表現を直接学習の対象とすることから、身近な場所にある様々な表現に日ごろから意識的に向き合う姿勢が必要である。ワードハンティングの試みは、以上のような問題意識から出発した。

「ワードハンティング」の課題を積み重ね、さらに授業でクラスメートとの交流をすることによって、学習者のことばに対する意識は確実に高まってくる。これは授業時間外の「課題」という形態を通して、国語教育を展開するという方向であるが、カリキュラムにおける授業時間数の削減という事態に対応するためにも、今後積極的に開拓するべき分野である。

そこで続けてワードハンティングの応用編として、採取の対象を「ことば」から「表現」へと拡大した「フレーズハンティング」の試みを提案する。ワードハンティングと同様に、身近な表現に対する学習者の意識を高め、様々な表現から学ぶという姿勢を身に付けることが、この課題の目標である。

フレーズハンティングは、中学生、高校生のいずれの学年にも導入することができる。まず、年間もしくは各学期を単位として、継続的に取り組む課題として位置付けたい。授業とは別個に、年間指導計画の中に取り入れるように工夫する。学期の初めの授業において、課題の趣旨と学習方法について十分に解説を加えたうえで、学習者に自主的に取り組ませることになる。ただし、課題としての性格から、必ず授業時にその成果を点検することが必要になる。さらに、授業中にフレーズハンティングの整理のための時間を特設して、クラスの中で情報交換をする機会を随時設けるようにする。

フレーズハンティングの学習方法に関しては、すでに紹介したワードハンティングに準拠して考える。すなわち学習者全員にＢ６サイズの情報カードを用意させ、そのカードに必要事項を記入するように指示を出す。必要事項として、次の各項目を提示する。

①　採取した表現のキーワード
②　採取した表現の引用
③　採取した表現の出典
④　表現を採取した年月日
⑤　採取した表現の表現上の特色
⑥　備考

学習者は、身近な場所を注意して見つめながら、特徴のある表現を採取する。例えば、新聞・雑誌やテレビなどの記事・番組やＣＭ、そして電車・バスなどの車内のポスター、街中や店先にある看板や商品の説明など、多様な言語表現に目を向けなければならない。

書物に関しては､内容ばかりではなく､本の帯に記された表現にも注目する必要が生じる。分かりやすい具体例としては、広告におけるキャッチコピーが挙げられる。キャッチコピーはそれに接する人に対するインパクトを考慮して、十分に工夫された表現になっていることが多い。

採取する基準として、特に優れた表現、工夫された表現になっていると判断できるものを中心とする。ただし、中には優れているというよりは、むしろ改善を要するような表現も含まれている。そのいずれの場合でもよいことにしておく。優れた表現を採取した場合には、その表現のどこがどのように優れているのか、表現の特徴はどのような点にあるのかを明らかにして、カードにまとめるようにする。また問題のある表現を採取した場合には、その表現のどこがどのように問題なのかということが明らかになるように整理する。いずれの場合にも、その表現をどこで採取したのかが分かるように、出典は可能な限り詳しく記入させる。中には、センテンスが長いものやある程度の分量の引用が必要な表現もあるので､「キーワード」としてその表現の中心となることばを抜き出すようにしておく。さらに、引用した表現の中に難解な語句が含まれているような場合には、その語意を辞書で調査して「備考」の欄に記入する。その他採取した表現に関する特記事項があれば、「備考」欄に記入しておく。学習者は以上のような方法に基づいて課題に取り組むことになる。

ワードハンティングの課題と比較すると、フレーズハンティングはまず該当する表現を探す段階から相応の努力が必要となる。採取の対象が「語」のレベルから「文」のレベルへと拡大されたことによって、注意して周辺の表現を探索しなければ、採取自体からして容易ではない。なかなか適当な表現が見当たらないと訴える学習者も出る。ある程度探索に慣れるまでは、授業時間の一部を費やして、採取した表現と出典を報告させるなどの配慮が必要となる。「気になる表現」をも採取対象とはするが、まずは「優れた表現」「特徴的な表現」を優先して探すように指導するとよい。

例えば次のような場所を入念に探索することによって、必ず何らかの特徴的な表現と出会うことができる。

① 新聞（特にスポーツ新聞）の見出し
② 週刊誌の広告における見出し（『ＡＥＲＡ』の一行コピー[3]なども含む）
③ 様々なＣＭのキャッチコピー
④ 本の帯にある広告の表現

新聞記事の見出しでは、短い表現の中に人の目を引くインパクトのある表現が用いられることが多い。特にスポーツ新聞の見出しは、「駄洒落」とも称されるようなユーモラスな表現の宝庫になっている。また車内の吊り広告に週刊誌の記事が紹介されているが、これもまた購入意欲をそそるような表現が含まれている。中でも朝日新聞社発行の『ＡＥＲＡ』という週刊誌には、広告専用のコピーが付いていて発行当初から話題になっている。その他、チラシを含めた様々な広告やテレビＣＭなどのキャッチコピー、さらに本の帯に記された広告の表現にも、注目すべき工夫が溢れている。これらの表現は、すべて販売実績を伸ばすという実利的な目的意識のもとで吟味されたものであるだけに、凝縮された表現のエッセンスを見ることができる。

フレーズハンティングの課題には、単に表現を引用するだけではなく、その表現の特徴に関しても分析をしてカードにまとめるという活動が加味されている。このため、学習者

は採取した表現に対して、何らかの考察を加える必要がある。さらに、難解な語句が含まれているような場合には、辞書を調べてその意味を明らかにしなければならない。

このように、ワードハンティングと比べるとより多くの作業を伴う課題ではあるが、継続して取り組むことによって、学習者の関心が身近な言語表現へと向けられてゆくことは確かである。身近な言語表現に興味・関心を抱くところから出発して、そのような表現から様々な工夫を学び、自らの表現へと生かすことができれば、この課題の目的は達成される。授業時間を利用した交流をも含めて、学習者の言語表現の世界を広げることを目指したい。

３　漢字・語彙指導との接点

本節ではワードハンティングの試みを漢字・語彙指導に生かすことを考えたが、続けて同じ方法を活用して、漢字そのものへの学習者の興味・関心を喚起することを考えてみたい。そもそも漢字は中国から伝来したものである。古代漢民族によって造り出された中国語を書き表す文字であった漢字は、日本においては日本語を表記するために多くの工夫が加えられてきた。そこで高校生を対象とした漢字指導の一環として、本家本元の中国に目を向けることを考えてみたい。漢字の歴史に関する様々な考察も興味深い内容ではあるが、本節では現代中国語との関連という観点を取り入れた漢字指導を考えることにする。

日本人の中国語学習に対する関心は高まりつつあり、高等学校でカリキュラムに中国語を設置する学校もある。国語科では、漢文の授業において例えば漢詩の中国音による朗読を紹介することは、従前から実施されている。そこで国語科の漢字指導の中に、現代中国語の話題を導入することによって、高校生が漢字の持つ多様な側面に触れ、彼らの漢字に対する興味・関心を喚起することが、ワードハンティングの主な目標となる。

漢字検定の普及によって、漢字の読み書き能力自体を問題にすることが多くなった。古くから国語の入学試験や定期試験の問題に、漢字の読み書きに関する問題が出題され、学習者はその対応という目的からひたすら漢字を覚えようとする。本節で紹介する試みは、このような暗記中心の漢字学習から一歩進んで、漢字への興味・関心の喚起と、世界の言語への視野の拡大を目指すものである。

台湾などでは旧字体の「繁体字」が使用されているが、現代中国語の表記では「簡体字」と称される字体が用いられている。すなわち中国では、漢字の字体を簡略化した表記にするという方向になっている。昨今では、例えば駅構内等の様々な表示に、日本語とともに英語に加えて、中国語と韓国語の表記が併記されるようになった。すなわち、中国語の表記に身近な場所で接する機会が増えたことになる。そこでまず、この簡体字という漢字の表記に注目してみたい。

中国語との関連に配慮した学習に入る際に、授業時間を利用して、現代中国語に関する基礎的な知識を与えるようにする。そこでは中国語が漢字のみで表記されること、横書きになっていることに言及し、簡体字とピンイン、簡単な発音や声調などに関する話題を提起する。そのうえで、前節で紹介したワードハンティングの要領に即して、身近な場所から中国語の漢字を採取して、日本で用いられている漢字との相違点に目を向けるようにする。

交通機関の案内の表示などに、中国語の表記が増えていることから、高校生が街で中国語を採取することは決して困難ではなくなった。インターネットも含めた身近で多様な場所から、中国語の漢字・語彙を探すことにする。前節で紹介したワードハンティングの方法に準拠した課題を提起する。採取した中国語の表記をカードに写して、それがどのような場所にあったのか、すなわち出典を具体的に記入し、採取年月日を記入する。「問題意識メモ」の欄も設けておく。なおこの課題に関しては、あらかじめ年間指導計画の中に位置付けたうえで、単に個人レベルの課題としてだけでなく、必ず授業時間内の活動を通してグループレベルおよびクラスレベルの学習を取り入れるようにしたい。

授業では、個々の学習者が持ち寄ったことばを漢和辞典及び中日辞典、そして簡体字の表記に関する参考文献などを用意して、彼らが採取してきた文字についての調査を実施させる。

ワードハンティングと同様に、個人で採取した漢字を、グループレベルで検証するという段階を経ることが大切である。特に中国語の調査に関しては、グループに一冊ずつ中日辞典と簡体字に関する資料を用意して、グループごとに効果的に調査が展開できるように配慮する。

カードに記録した中国語の漢字・語彙は、辞書と参考資料、さらにインターネットを使用するなど様々な工夫をして、学習者に調査させる。その漢字の読み方をピンインで記入し、漢字の意味や、日本語の漢字で相当する文字を調べられる範囲で調べて記入するように指示をする。

例えば駅構内で「检票口」ということばを採取したら、中日辞典によってこのことばのピンインと意味を調べてカードに写す。そして「检」という文字が「検」の簡体字であることを確認する。そして「票」が切符という意味であることが分かると、このことばの意味を類推しやすくなる。このような学習過程を通して、日本語の「改札口」ということばとの対応を知ることができる。発音からすると、日本語とまったく異質な中国語ではあるが、表記のうえでは、関連する要素が多い。あわせて、中国の簡体字と日本の漢字との比較という点においても、学習者の漢字に対する興味・関心を育てることができる。

同じ漢字を用いても、日本語と中国語では意味の異なることばも多い。例えば、日本語の「手紙」は中国語では「トイレットペーパー」を表し、日本語の「汽車」は中国語では「自動車」を表すなどのように、意味の相違が生ずる。漢字の学習を通して高校生がこのような問題に目を向け、日中の文化の共通点と相違点を知ることは、次の時代を担うために必要なことである。

本節で取り上げたような形で漢字指導を展開するに際しては、指導者の側でも中国語に関する知見が必要になる。十分な研究を積み重ねて授業に臨むようにしたい。

本節では、中学生および高校生に対する漢字指導の工夫として、ワードハンティングの方法を活用することを提案した。漢字の学習が、単に大学入試への対応や漢字検定に合格するということのみに向かう傾向にある中で、学習者の生きる「いま、ここ」に目を向けて、ことばに対する彼らの興味・関心を喚起するという方向を目指すことは重要な課題である。

漢字を取り立てて学習するという方向から、語彙との関連において、すなわち「ことば」という観点から考える必要がある。本節では、わたくしが実践を続けてきたワードハンテ

ィングの方法を用いた漢字・語彙指導を紹介した。「漢字指導」から「漢字・語彙指導」へと、指導のあり方を見直してみたい。

さらに本節では現代中国語との関連という要素に着目して、国際的な観点から「ことば」を捉えるという視点を取り入れてみた。この視点は、ワードハンティングからさらにフレーズハンティングにまで広げて実践する際にも、重視したい観点である。ちなみに、中国語で書かれた文章に接したとき、特に中国語に対する知識を持たなくても、その文章のおおよその意味が理解できるのは、日中が漢字という文字を共有するという文化的に背景による。高校生の漢字指導の中に、現代中国語との関連という視点を置くことによって様々な発見がもたらされ、ことばに対する視野が広がるのは事実である。今後より具体的な授業の構想として、国語教育への中国語の活用を検討したいと思う。

注

1　日本国語教育学会編『ことばの学び手を育てる国語単元学習の新展開―高等学校編』（東洋館出版社、１９９２．８）に収録。

2　見坊豪紀『ことばの海をゆく』（朝日新聞社、１９７６．１１）による。

3　『ＡＥＲＡ』は朝日新聞社から刊行されている週刊誌だが、その新聞広告や電車の中吊り広告に、時代を風刺的に表現した１行のキャッチコピーが毎号にわたって紹介されている。